NY エッセイ 57

中瀬有紀

主張と協調



Kafka on the Shore, directed by Yukio Ninagawa: the view from the followspot booth at the David H. Koch Theater.

村上春樹氏の傑作長編小説を蜷川幸雄氏が舞台化した『海辺のカフカ』が、リンカーン・センター・フェスティバルでニューヨーク公演初日を終え、満員の客席から沸き起こったスタンディング・オベーションと鳴りやまない拍手が、いまでも脳裏に焼き付いて離れません。宮沢りえさんをはじめとする豪華な出演者陣の熱演を讃えるだけではなく、全身黒い衣裳を身にまとい装置を舞台上で動かしていた日本人スタッフがカーテンコールで表に出たときに彼らにも送られた大きな歓声が、公演の成功を証明していたように感じました。私は壮大なスケールの舞台芸術をたった5日間の仕込みと稽古で完成させた舞台裏に居合わせ、文化も言語も異なる日本とアメリカ両方のプロフェッショナルが一致団結するためには何が必要なのかを学ぶこととなりました。

舞台『海辺のカフカ』の照明デザイナーは服部基氏です。オペレーターはライティングカンパニーあかり組の三澤裕史氏と小沢淳氏、そしてセンターチーフの古屋あかね氏も渡米し、フェスティバル側の照明デザインチームがまとめるDavid H. Koch Theaterの現地照明オペレーターたちとともに服部氏の創造するあかりを再現することとなりました。日本とアメリカの舞台照明業務はそれぞれに全く異なる発展の歴史をもち、今でこそ使用器材に大きな差はなくなりつつありますが、照明図面や必要資料の形式、チーム構成、設営の段取りや組合（ユニオン）の有無などさまざまな違いが指摘できます。最大の相違点はデザイナーとオペレーターの関係でしょう。それらが2つの異なる部門であると見なすアメリカでは、双方の情報交換に日本で必要とされる何倍もの資料が決められた形式で求められます。アメリカにおいてその資料制作は、アシスタント・デザイナーの大事な役割の一つでもあります。あかりをもって物語を伝えるというゴールは同じなのですが、そこに行き着く過程が異なるため、日米の照明家が一緒に働くにはお互いの違いを認識し寛容に接することにより、どこにどうやって均衡状態を作るかが課題となります。今回、日米共同照明チームの平衡をもたらしたのは、日本側の打ち立てた明確な目標、それを伝えたいという強い熱意と伝えるための徹底した努力、またアメリカ側の傾聴と要求に応えることのできる技術だったと言えるでしょう。両者がお互いを尊敬し他者を受け入れることのできる自信が、文化と言語の壁を溶かしたように思います。

私が舞台芸術に惹かれる理由は、1つの空間で出演者と制作者と観客が、皆で1つのものを一緒に作る唯一無二のエンターテイメントだからです。したがって、その制作過程では、皆の歩み寄りが成功の鍵を握っており、特に『海辺のカフカ』ニューヨーク公演のように、異なる様式をもつ者同士が共働するときには尚更、相互理解の重要性が浮き彫りとなります。限られた時間内にあの素晴らしい舞台照明を再現した服部氏とライティングカンパニーあかり組が率いる日米照明チームの成果は、異文化間で挑戦を続ける人々を勇気づけたことでしょう。このような素晴らしい現場に私を呼んでくださった、株式会社ホリプロ、金井大道具社長の金井勇一郎氏と、ニューヨーク在住の舞台美術家、幹子・鈴木・マックアダムス氏にこの場をお借りしてお礼申し上げます。